

世代をつなぐ高齢社会

おじいちゃん、おばあちゃんをつながる——
お父さん、お母さんをつながる——
子や孫をつながる——
私たちは、世代間のつながりを実感している
でしょうか。



ゆっくり話がしたい

山田祥三さん(74歳)は、都心から電車で二時間ほどの静かな町で、奥さんの久子さん(70歳)と二人暮らしです。

勤めの関係で東京都内に住む長男の雅夫さん(42歳)は、二か月に一度ほど、妻の順子さん(34歳)と健太くん(5歳)を連れて訪ねてきていました。しかし、最近は仕事が忙しくなり、順子さんと健太くんだけで訪ねてくることが多くなりました。

「おじいちゃん、おばあちゃん。こんに

ちは」

「おお、健太か、よく来たね」

健太くんは家の上がるとすぐ祥三さんの膝にちよこんと座りました。

「お父さん、お母さん、夏休みには健太がお泊まりをさせてもらって、お世話になりました」と順子さん。

「いや、こちらこそ楽しませてもらいました。ねえ、あなた」

「うん。ただね、健太が帰ったあと、足腰が少し痛かったな。ハハハ。ところで、雅夫は元気になっているか」

「はい、元気です。でも、帰りが遅いので、ここ三日は健太と顔を合わせていな





いんですよ」

「そうか、雅夫もたいへんだな……」

久子さんも心配そうです。

「仕事じゃ仕方ないけれど、たまにはゆつくり話がしたいわね。あなたと健太くんも、かわいそうだわ……。今のところ私たちは、それぞれの趣味もあるし、年金も受けているから、ありがたいことだと思っているわ。近くに立派な総合病院もできたから、いざというときも安心よ。でもね、年をとると、やつぱりこれから先のことが気になるのよ。雅夫やあなたたちにもいろいろと話しておきたいこともあるし」

順子さんは、祥三さんと久子さんを見て、なんとなく寂しきを感じるのでした。

急速に進む高齢社会



んでいるかが分かります。

このように、高齢化の速度に加えて、数年後には高齢化率でも世界のトップを走るこ

とになるわが国には、どこにも見本となる国はないといつてよいでしょう。

今後、試行錯誤を積み重ね、他国の模範となるような対応をしていかなければなりません。

わが国の高齢社会は、他に例を見ない速さで進んでいます。

平成六年（一九九四）に、総人口に占める六十五歳以上の高齢者人口の割合（高齢化率）は一五%を超え、高齢化社会から高齢社会となりました。

また、高齢化率が七%を超えてから倍の一四%に達するまでにかかった年数（高齢化の速度）を比較すると、日本に次いで速いドイツでも四十年かかっているのに対し、わが国は、二十四年しかかかっていません。高齢化がいかに速く進

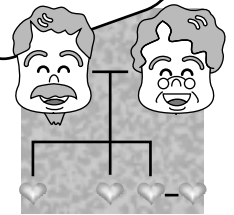
そのためには、

身のまわりの高齢者の姿を通して私たち一人ひとりが自分のこととして考えていく必要があるといえるでしょう。

こどもの姿がみえないね



代々の文化・知恵を伝える



と記しています。

佐野家では代々、父親は仕事をとり仕切る重要な役目をもち、不在が多かったために

かつての日本の家族は、三世代同居が

多く、祖父、父母、孫のふれあいが自然に生活の中に溶け込んでいました。現在においても、このような三世代がふれあう家庭も多いことでしょう。

京都府で造園業を営む十六代目・佐野藤右衛門氏は、その著書『桜のいのち庭のこころ』（草思社刊）の中で、

「子どものころは、いつもおじいさんと一緒にいて、いろいろな機会に植木職人の心構えなどを教わった」

子どもと接する機会はほとんどなく、おじいさんが孫の守り役でした。

佐野家のおじいさんは、孫に、木や庭について、そのまたおじいさんから教わったことや、新たに自分の人生で会得したことを話し伝えてきたといいます。

「わしは、おじいと一緒にあったのやら、おじいからわたしまでの七十年と、さらにおじいのおじいさんまでの七十年を遡りますわな。それを足すとね、二百年ぐらいのことは分かりますわ」

このように、三世代同居が多かった時代には、仕事で多忙な親世代を補うよう

に、祖父母世代が先人から伝えられた文化や自分たちの経験・知恵を、日常の生活の中で自然に伝えてきたのです。

一方、今日のように核家族が増えてく



ると、かつてのように先人や祖父母の経験や知恵は、なかなか伝わらなくなってきたいます。祖父母がいて、親がいて、自分につながっているという「いのち」のつながりや、祖父母や両親の思いや願い、祈りが自分たちに向けられているという心のつながりを、孫世代が自覚できない時代になっているのではないのでしょうか。

その意味で、今日の社会では、世代間のつながりを意識的につくりだしていく必要があるでしょう。そのためには、まず親世代が祖父母世代とのつながりをきちんとつくっておくことが大切です。

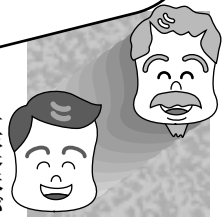
具体的には、親が自分たちのことや祖父母のことを話したり、親自身が祖父母を尊敬する態度を子どもに示すことなどが挙げられるでしょう。

父母・祖父母は どのように 生きてきたのか

世代間の「つながり」を求めようとい
う気持ちは、高齢者に限らず、誰の心にもある自然な欲求といえるでしょう。

それに応えるように、高齢者の思いや
経験を引き出して伝えようという若者世
代が出てきています。

盛池雄歩さん(33歳)は、幼いころから
おばあきん子で、祖母の関東大震災での
怖い思い出や戦争中に乳飲み子(盛池さ
んの父)をおんぶして山に逃げた話など



を聞いて育ったといいます。

おばあきんの目で見えた歴史
は、教科書で学ぶそれとはひ
と味違い、とても新鮮であり
真実味があつたそうです。盛池さんは、
祖父母のいのちが父母につながり、今日
の自分につながっていることを肌を通し
て実感したことでしょう。

数年前、おばあきんが寝たきり状態に
なつたとき、盛池さんは、こうした話を
しっかりと書き留めたいと思い、ベッド
の脇で熱心に「聞き書き」を行いました。

しかし、次第に元気を失つたおばあき
んは、しばらくして亡くなつてしまいま
した。盛池さんにとつて、おばあきんの
死は大きなショックだったといいます。
そのことをきっかけに、盛池さんは地



元の高齢者を訪ねて、聞き書きを行うようになりました。

最初、高齢者からはなかなか心を開い

てもらえないこともありました。それでも、ひとたび口を開くと、楽しかったこと、苦しかったことなど、さまざまな思い出をうれしそうに語り、ときには、身内にも話していないようなことまで打ち明けられることもあったそうです。

盛池さんは、こうした活動をもつと若い人たちにも広げようと「昭和の記憶」というNPO（非営利法人）を設立しました。盛池さんは次のように述べています。

「この活動を通じて、祖父母や地域の高齢者との交流が活性化すれば、子どもたちは、国の歴史や地域の歴史、習慣、伝統行事などにも詳しくなります。高齢者の深く豊かな知恵から、多くを学び、聞く力、表現する力という、人生を生きて

いく上で大切な力が育はぐまれることにもなります」(平成15年5月10日『産経新聞』より)

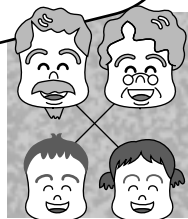
若者世代にとつて、祖父母や父母のこれまでを知ることが、自分が、今、ここに生きている意味を知るための大切な学びです。いわば、自分のルーツ(根源)をさぐる心の旅といつてもよいでしょう。それは、未来の自分の生き方を考えるうえで大切な基盤きばんになるにちがいません。

一方、高齢者にとつては、それまで自分が歩んできた人生について聞いてもらう喜びとともに、その過程で身につけてきた、さまざまな知恵や考え方を子や孫に伝えることで、安心と満足を得ることにつながるでしょう。

なぜなら、高齢者には、生きた証あかしを残したい、安心して後を託たくしたいという気持ちがあるからです。



世代間の つながりの場を 意識してつくる



多くの高齢者の言葉や態度は、長年の経験に裏打ちされた重みを持っています。親世代だけでは容易に説明し得ない、「人が生きていくうえでの知恵」を持っています。

たとえば、自分が孫と同じ年齢のときには何をしていた、どのようなことを考えていたかを語って伝えることができるでしょう。それは、孫にとつて、興味深いことであるにちがいません。

また、親の子ども時代のこととを、孫に語ってやることも大切なことです。子どもの成長には、生きるうえでの身近なモデルが必要です。親の子ども時代を知ること、子は親をより身近に感じることでしよう。祖父母は、孫世代と親世代とのよき橋渡し役にもなります。

パソコンを使ったインターネットや携帯電話など、利便性が求められる一方で、直接に顔を合わせてのコミュニケーションが希薄きはくになっていく今日です。心の交流は、いつそう大切になってきます。そのためには、ふだんから祖父母、親、孫という世代間のつながりの場を、私たちが生活の中で意識してつくっておくことが大切でしょう。

高齢者のイメージを変える

聖路加国際病院理事長・同名誉院長を務め、九十一歳で現役の医師でもある日野原重明氏は、とかくマイナスにとらえられがちな高齢者へのイメージを変えることが大切だと述べています。

「まず、高齢者が働くということは、お金を稼ぐという意味ではなく、高齢者が自分の能力を社会に還元しながら生きるということなのです。つまり、自分のこと、自分の家庭のことだけではなく、広く社会に目を向け、自分ができる社会貢献を考えていくということなのです。それが同時

に、高齢者自身の生きがいにもなるのです。

次に、健康とは、検査の結果に問題が無いことをいうのではなく、多少、病気や障害があつたとしても、消極的にならず、自分の可能性のほうに目を向け、さわやかに生きることなのです」



さらに、日野原氏は、

「これから、小説を書くつもりだし、九十五歳になったらゴルフも始めようと思っ
ています。老いてこそ輝いて生きる姿を見れば、子どもたちも人生に希望を

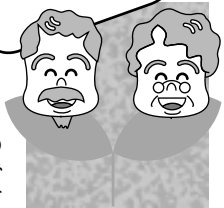


持つし、命の大切さを実感します。『年をとるのは素晴らしい』と思われるような、『生き方のモデル』を示していきたい』と述べています。

(平成15年4月14日『読売新聞』参照)



高齢社会をチャンスに



高齢者が長い人生で培った持ち味を生き生きと発揮することにより、より円熟した社会が到来するチャンスにもなるのです。そのためには、世代間の「つながり」を回復し、高齢者を尊重することが大切です。

そのように受けとめていけば、高齢社会はピンチではなく、むしろ、一つのチャンスになるといえるのではないのでしょうか。

よりよい高齢社会を築くには、今後、解決していかなければならないさまざまな問題があります。しかし、一面には、豊かな知識や経験を社会が共有できるという見方があることも忘れてはならないでしょう。

そのように受けとめていけば、高齢社会はピンチではなく、むしろ、一つのチャンスになるといえるのではないのでしょうか。



おじいちゃんとおばあちゃんの 影響は大きい

一週間後、祥三さん夫妻のもとに、長男の雅夫さん夫妻からビデオテープが送られてきました。そこには雅夫さんと健太くんが公園で遊んでいる風景が映し出されていました。

そしてビデオテープの最後に、健太くんの肩を抱いた雅夫さんから次のようなメッセージが添えられました。

——最近忙しくて、なかなか顔も出せなくてごめん。本当はそちらに行つてゆつくり話をしたいと思うのですが、どうし



ても行けないときは、ビデオレターで二人にメッセージを送ることにしました。順子の発案です。

先日、家で飼っていた金魚が一匹死んでしまいました。健太と一緒に近くの空き地に行き、埋めましたが、ふと見ると健太が線香をあげるまねをし、合掌しているのです。

うちには仏壇がないので、おじいちゃんとおばあちゃんの影響だと思つています。「いのち」の大切さについて、私が言い聞かせなくても、息子に伝わっていることに、驚きと、感化の大きさを感じました。ありがとう。



来月は、必ず三人そろっておじやまします。ではお元気で——

祥三さんは、ビデオを見終わると久子さんに微笑^{ほほえ}んで言いました。

「母さん、便せんを出しておくれ」

久子さんも笑ってうなずきました。

九月十五日は敬老の日です。

私たち一人ひとりが高齢社会のあり方についてあらためて問い直すとともに、身近な家庭で、地域で、高齢者と接する機会をつくり、世代間のつながりを充実させていきたいものです。

ぜひ意識して、ひと言かけてみてください。
さ。

「おじいちゃん、話そうよ！」

「おばあちゃん、話そうよ！」